

鋏の頃

アルト

朝の8時過ぎ・・・通勤ラッシュ時のプラットフォームは、どの方向を向いても人で溢れかえっている。

電車を待つ通勤客の列に混じり、携帯ゲーム片手にいつものように暇を潰していたのだが・・・雑踏に紛れて、耳障りにもヘッドホンから漏れる音楽を聞き取った。不快になり・・・思わず眉を寄せた。

どんな奴かと、何気なく視線を周りに廻らせる。

どうやら・・・僕の右斜め前に並んでいる奴なのだと分かった。

よくよく見れば、自分が着ている制服と同じ・・・しかも、さらによくよく見れば、同じクラスの奴だった。

こいつの名前は、原 翔太。

いつもへらへらと締まりなく笑って、言動も軽くとにかくいい加減で・・・クラスのムードメーカーなのはいいが、度々 授業を止めたりするし・・・目立つし、騒がしいし、学校に遊びに来てるのかって思えるくらいだ。

そのくせ、派手な髪と顔をしてるから女子人気は当然、友人も顔も広い。

・・・僕は、原が苦手だ。嫌いとかじゃなくて、苦手なんだ。

地味で・・・暗くて・・・友人なんか片手で数えられる程度の僕とは、正反対の人気者。疎ましい反面、自分もこんな風だったら・・・なんて、羨ましく見ていた自分も居た。

それにしても、同じ電車だったなんて知らなかった。

話したことなんて・・・挨拶すらしたことないんだから、気にもしてなかった。

いつもならどうでもいいことだと、すぐに目を逸らすところなのだが・・・この時の僕は、自分に向けられた無防備な背中にちょっとした・・・本当に些細な・・・本気なんかじゃない、悪戯心が芽生えてしまったんだ。